松百韵

027
311
1

禁帯出

027
311
1

愛知女專
第11429號
圖書

掟

一

一順ハ六居再吟より枕之事
但新き新人之附句と定へし

一

茶ハ免れく出き屋く酒き出まり
もほとめ久しきき粉ハ人の台める
抛るれハかまふ沛しきす

一

執筆ゟ菓子喰ふ事

右之當日の新式なを案俳諧乃平生心とハハ
雅言のねあり呼俗語乃いやしれ聞りうず
日夜ふ工夫を屋きハ了このすなりせ　あれ
老人ヲ尚きヲり畄し

宝暦丁丑七月節

川布六
一野亮
樹楚笠

冷谷山涼時興行

秋来りや岑をきはれ雲のまく　川芬坊

かり川さのゝ錦撥宝珠乃肌　布六

月乃友こそり吹人来かて探て　滄布

官名ハ晴しと来れ都也　葉雨

彫まれたふ字の水も煙出し　巨竹

婦とさを尺ゝかう錦る薮　和推

今乃都ほとくまれてハなかれさう　可静

傘かりく借てすらく　楚笠

し縫付はり捨てと百姓ハ　野亮

これハ喰ふまい古い軍法　坊

盃と桃子も智恵のまとかえふ　六

志られハ晴る雲ハ琴むく　布

拝殿を色打あれと大名居　雨

ありくゝ行りくも智能の葉針　竹

持ねる人手をまねむ摺火うち　推

吹ころ霧んいさらひの闇　静

啼さく虫を黙りく　凄むし　笠

霧くまで雨川てくちく塗下詰　六

呵ゝと背いくなんの嫁らねふ　坊

寝の日影もたけて膳掛　亮

時くハ目も休うり　無是るを　竹

とうみる芭乃菊畄了水　石

はくろまで朝吹も寒い笘　静

脈の乱さ髪ハ許さ子　笠

口ノ神仏て肉織れ小さやき　布

拵となへくやきむ味噌擂　推

御法船よおゝち積川く真白れ　兎

七墓見り来らく千万　坊

よ家祖小おゥても年もよゝ虫やら　六

砥多れささり肥く石菖　竹

ちりや振卯月八日も張て行る　亮

とれ兒くちハたとれ恥し　静

狆の子ホ火皿一文なけ也高　笠

長暖簾乃中りは杓　布

此式ハ浄霊通りや噂喜び　推

さしと隆りをホ月ハはまく　六

餌穂と川上から打れ網の音　坊
松ある里乃犬なれし那ア　笠
無理な利を付て問屋ハ麁でやる　布
手足もちゞむばかり寒　ゐ
行ふくに河鰻膾すゝり山肴　竹
ところ網押ゆ気少いふ細れ　亮
挑灯乃紋になつかしく　立葵　笠

背を向けまと鼻ハ算段　坊
不埒ハ出来た者されぬ行燈　静
ろこの請子を用ゐてハ取し　推
座田むし誂へ尺をて摺くなり　六
鳧乃筮相ハちと窮しもの　布
月星の相暈あれハ羨日和　ゐ
風流の対に加ア蜂の巣　竹

手ぬ細ゆき無うちり汲吉く　亮
　附分史志　置ヶ傾けて　靜
叔父と伯父氣の長のて短けれ　坊
　揚諸行くて多ハ桶ふせ　面
仕角新し縦ふて三度うけ場也　竹
　弁慶き坂よ　大抱れうら　六
声川春の泥ふようれし扉ふる　布

　庭りまてとり黒さし榰　笠
朝乃間よ蜘の下るら吉事あ　面
　諸生の中り紀き口きて　竹
割合の孫服こける芝居見て　椎
　忍ンく新さ袖よ志ゝとの　亮
月もまだ明ヶぬよ起きて親旦那　靜
　ようも八年まちく　滋榜　坊

篁むれの笠ハうねる露しぐれ　六

布子乃中にちぢしろいな　布

於茶も加と地蔵の利生いひまして　亮

家内のうわさ乳母か一番　静

菊流す実盤行かる凄満りし　竹

来る里と蔵ま　明の春ゝ那　推

先からまんれから　雀うくえむすを　笠

火燵のゆるして座敷あり　呂

元よりハ肉ふ太川むゝ病ある楽　坊

又を小野て壬生の業うね　亮

栗の咲け時鳥ろしい　月乃晴　布

角ハゆゑ詣乃廉もさびしき　笠

うつ坂の雛衆ハ　若ゐうちの事　静

持ちえししさ侯服も座る　六

名残

かすみあふ暮乃始よし帰けり　推

和尚のよびに行て歩　坊

時明を香る風ハ出ぐりに　両

花乃ふところ出て旅　竹

小細工ハきいるまあれど拙手す　六

大晦日とて半向る一日　静

行れ帰ル中り苔く垣の梅　亮

板なけりた　漉た乃うへ　布

行房まと有ハある時り無の智恵　竹

本則ヲ行く笠をかられ家　推

売た俳集行咄きりも立ねうう　坊

くらかり峠灯すきて火　六

十五夜も雲まわく　斤破扇　笠

芋を関子も樽子みそ屁　両

名り

子の中より鶏こ紛毋乃うはり立　推

一首れゝる皆を泣せる　亮

ことゞらいはゞ異見も水の泡　布

風呂屋乃稽子凧ハまつとも　笠

扇子足袋かけゝ草履れあり石　亮

続より先へ夜を明てぬる　推

歌くの八雲うこ匂ゑを峯れ花　静

今日の筆者枕百韵　執筆

百韵は座れ吟聲了悦ひ乃関
なけれは來へ弁里舘を先としか
白羽仙菊南舎なと 押者来つく
いまゝ日ゝし後巻ぬくて以そ貴たり
けるヶ暑よりつきまれ点さと宮八

述句も墻の翅に縋て皆ちりくに
集りし中にも老武者のかゝれしゆゑ
むかしを今にうつしてましし毬
の花を見て面白かりしそうなす

出ぬいて風も音きくけふの秋　川芬坊

むら空に一葉見えて蜻蛉　曽文

蓮芋も隣はなれけり月待て　禾布

宗匠にもちと蕭條たり　路十

雇人をはなれし自判のんのくか　滄布

双六のかけせむ気もみて　坊

尺八りはの音きこゆれきせる筒　曽

生玉拾ひ抱きし袋なし　禾

雲に入る中空とゑれかぬはなり　路

きく花も咲除りをさく　滄

常香の立わかれた置ゝかけ　坊

やうて佳気をもちて悟む　曽

鬼も出るやうに見えて丹波口　釆

糞桶かつぐ侭にたどる路　路

いさかひに道理きかれハ家に帰る　滄

髭さけてそ気ハ変人なり　坊

風乃香をいれて出し鮨凡枝欄に月　曽

筧り給ふ行錬乃浪　釆

下向にハ見れも屁く一銭ずゝ　路

のこりすれに不道乃錢　滄

降き出中日二日ぞ　左不様　坊

嘸きるやうれ温飩志わられ　曽

脚をとにある義も尺ず奥きり　釆

志ら出て事乃きも　呼子鳥　路

むし暑公ゝ山を称すハ一生かくなく

其切も逆す冨士ハ一樹に出現せりとかう

三年味噌五斗酒まづ味を好く
人ハ志ら須只一夜鮓南座讃の取
あく無ふりても俳諧未も可味ふ有
けまてを杜集れ手ふき紙賛して求の
偶ふ巻尾ふ筆す

隠士蝶翁